書物逍遥

大日向雅美

写真提供：
アートスタジオ　スズキ

文学から心理学へ

私の幼稚園時代は不登園、小学校も休みがち。学校が楽しいと思ったのは高校生になってから。現代国語担当の森本謙四郎先生（カリタス学園）がガリ版刷りで配ってくださった詩や文学の一節に、明治・大正・昭和の時代を生きた人々の姿を思い描く時間が至福だった。集団生活は苦手だったが、けっして人間嫌いではなかったのだと思う。

大学（お茶の水女子大学）に入学した翌日、図書館に行った。ガリ版刷りでしか見ることのなかった詩や小説を本として直接手にした時、「ああ、これが大学なんだ！」と大学生になった喜びに胸震えたことを鮮明に覚えている。

大学の専攻は心理学だったが、これはつまらなかった。心理学の論文や書物をいくら読んでも、具体的な人が見えてこない。心理学に幻滅し、国文科の講義に入り浸った。卒業時には国語の教員免許が取れていた。

国文科の先生との触れ合いにも恵まれた。堤精二先生（近世日本文学）の研究室を訪れた時、好きな作家はいるかと尋ねられ、横光利一と堀辰雄と答えた。「いかにもあなたらしい。好きな作家にその人らしさが感じられることが私は好きだ。あなたらしさを大切になさい」と言われた。先生のこの言葉に「自分らしさを貫いてもいいんだ」と思えた。

一方、心理学には相変わらず興味が持てなかった。そんな私に、藤永保先生（発達心理学）がご自身の論文の抜き刷りを手渡してくださった。難解で、何度も断念しかけたが、先生のお心を無駄にしてはいけないと頑張って、ようやく最後の頁に辿り着いた時、次の文章が目に入った。「心理学の法則が適用されるべき対象は、特定文化に密着した特定の型の人間であり、けっして抽象的な人間一般ではない。心理学のごとき人間を対象とした学問は、特定文化のもつ重心なり欠陥なりに、まず第一の関心を寄せなければならない」。この数行に出会えなかったら、私は別の道を歩んでいたかもしれない。心理学に馴染めなかった虚しさが解明され、高校時代の文学への関心を心理学に活かしたいと、時を置かずに藤永先生のもとに駆け付けた。以来、母性を賛美偏重する日本文化の特性を対象として、「伝統的母性観への反証」を試みる研究に没頭し、博士論文『母性の研究』（日本評論社）に結実した。

私の論文や著書には心理学領域の研究の引用が少ないと言われたことがある。人一般を語る心理学よりも、生の人間の喜怒哀楽に惹かれる。有吉佐和子『華岡青洲の妻』、江藤淳『成熟と喪失』、河合隼雄『母性社会日本の病理』、安岡章太郎『海辺の光景』等々に多くの示唆を得た。研究手法も人に直接会うフィールドワークを主としている。今はＮＰＯ活動で地域の人との触れ合いが楽しい。集団生活は苦手だったが、人への興味は強かった子ども時代の自分は、今も変わっていないのかもしれない。

（恵泉女学園大学　学長）